

「3年間を振り返って」

2組 館澤諭一

入学当初の自分は、なんでもできる気がしている幼い子供だった。今の私が絶対にしないような愚かな振る舞いを繰り返していた。当時の自分はただ無垢で純粹で、それゆえ残酷で愚鈍だったと、3年後のいわゆる今の私は思う。

脳裏に焼き付いた不快な記憶が呼び起こされる時がたまにある。その度に、当時の自分や周囲の人間の振る舞いを責め、そんなことをしても無駄だと私は思う。

重々しく、鎖に繋がれた記憶を背負いながら今の私は生きている。できれば捨ててしまいたい。何も知らなかったあの頃に戻りたい。ただ、そんなことはできやしないし、もし仮にできたとしても、結局は同じことの繰り返しになるのだと自分に言い聞かせている。

ここまで歩いてきた道を振り返ると、様々な汚点が目に付く。自分の人生の足跡がそのまま汚点となったのではないかと疑うほどの汚点の数である。立つ鳥跡を濁さずと言うが、まさにその正反対である。しかし、人間は鳥のように飛んで移動することはできない。一切の汚点を残さず歩み続けることなど不可能だ。もしこれまでの人生で一切の汚点を残さなかったという者がいれば、それはすなわち歩かなかった者である。と、私は自分に言い聞かせてみる。

結局、ここまでの人生で私は何をしたのだろうか。ただ至る所で迷惑をかけ、汚点を残しただけなのかもしれない。と私は自分で自分の人生を眺めたりする。

しかし私がここに存在し、生きていることには何か意義があるはずだ。と私は自分に語りかける。おそらく私は死ぬまで歩を止めることができないだろう。進み続けるしかないのだ。と、自分の背中を押しながら、ここまで生きてきた。

これからもきっとそう生き続けるのだろう。私の眼前に真っ新たな道が広がっている。